TRDI
Technical Research & Development Institute
Ministry of Defense

技本弘報

発　行
技術研究本部　総務部総務課
〒162-8830
東京都新宿区市谷本村町5-1
☎03（3268）3111㈹

本部長着任挨拶

技術研究本部長　佐々木達郎

このたび技術研究本部長を拝命致しました佐々木達郎です。宜しくお願い致します。

防衛省自衛隊は、任務の多様化、庁から省への移行という大きな変貌を遂げて参りましたが、そのような中、皆さんご承知のように、様々な不祥事が続発し、世間からの厳しい目にさらされております。

現在、我々は、この様な厳しい環境に置かれていることを認識し、失われた信頼を回復するため、再びこの様な不祥事を起こさぬよう、それぞれの職場に置いて、厳正な職務の遂行に努めなければならないと言うことを最初に申し上げます。

さて、技術研究本部は安江前本部長の時代に、新戦車、ＰＸ、ＣＸのほか、弾道ミサイルの日米共同開発着手など大きな事業を軌道に乗せ、組織的にも大幅な改編を行い、積極的な広報活動を行うなど着実に改革を推進してこられました。

この様な環境下で、各自衛隊の要求に応え、現在進行中の事業を的確に推進し、要求元の自衛隊にキチンと装備品を提供していくとともに、現在進めております改革を確固としたものにし、技術研究本部の存在を内外に示していかなければならないこの難しい時期に、技術研究本部長という大任を仰せつかり、責任の重大さを痛感しておりますが、一面、再び研究開発の現場で働けることは喜びでもあります。

私は、常日頃から、技術研究本部が基本的に行わなければならない任務は大別して次の三つであると思っています。

第一は、各幕の要求に基づいた研究開発装備品を適時、適切に、合理的なコストで提供することであります。

今日の国際社会の状況など防衛省自衛隊を取り巻く急激な環境変化や科学技術の著しい進歩は、従来のように装備品の研究開発に一声十年と言った長期間をかけることは許されません。また要求元である各幕等にも待ってもらえません。そのような時間をかけた装備品は運用時点でともすれば陳腐化してしまいます。多くの分野の優れた人材を擁する技術研究本部こそが、これまでの経験を生かし、我が国の優れた技術を徹底調査し、一つの装備品を開発する度に、徒にその構成品を開発することから始めることは厳に慎み、既成の技術を積極的に活用し、より早く、より安く、より使いやすい装備品を提供することが可能だと確信しております。

第二は、必ずしも既存の装備に囚われずに、将来の戦闘様相において、敵に優越する様な斬新な装備品を各自衛隊に提供することであります。

大学や公的な研究機関、産業界などに有る我が国の最先端の科学技術のみならず既成技術にも日常的に目を配り、その応用の観点から斬新な装備品の構想を考え、具体的なプロトタイプを提供し、ユーザーの新たなニーズを模索していくことであります。この課題こそ、技術研究本部の職員の技術者魂を沸き立たせる仕事ですが、最初に申し上げた幕要求の装備品の研究開発を経験し、多くの「知見」と「勘」を養った者こそが本当の実力を発揮できる任務だと思います。

第三は、各自衛隊が運用する装備品等に技術的観点で問題が生じた場合、或いは、内局等が行政上の必要性から技術的知見が必要とされる場合、的確な相談や助言、或いは、支援ができることであります。

この第三の課題は、技術研究本部という組織の能力とこの組織に対する各自衛隊や内局等の信頼があって初めて可能なことであります。また、我々技術研究本部の職員一人ひとりが、この様な要請があった場合に、気持ち良く速やかに対応する意識と態度がなければいけません。

今後、私は、この三点をベースに仕事に取り組んで参りたいと思っておりますが、私たちは、常に、自分たちの置かれている各々の立場での任務を自覚し、業務に取り組むべきと思います。すなわち、私たちは、常に自分自身に「汝、なんのためにそこにありや」と問いかけて、大学や独立行政法人の研究機関と異なって、自衛隊というユーザを抱える防衛省の技術研究本部の職員であると言うことを常に意識して頂きたいと思います。

この様な自覚の下、技術研究本部の全職員が一丸となって任務遂行のため明るく、気持ち良く仕事が出来ますよう、私自身出来るだけ現場に出向き、皆様の声に耳を傾け、任務遂行のため一生懸命働かれる方々が正しく評価される環境整備に努めて参りたいと思います。

最後になりますが、皆様におかれましては、健康に留意され日々の職務に精励されますようお願いして私の着任の挨拶と致します。

平成二十年三月二十四日

江渡防衛副大臣
艦艇装備研究所を視察

平成二十年六月四日㈬深緑の候、梅雨に入り曇天が続くなか、本日は天候に恵まれ夏を思わす暖かい日差しの中、江渡防衛副大臣が艦艇装備研究所を視察された。

十三時四十分予定どおり、内部部局秋山技術監・装備局佐々木本部員の随行のもと佐々木本部長、大野事業監理部長、九田艦艇装備研究所長、堤研究企画官、谷口総務課長、艦艇装備研究所幹部の出迎えの中、到着された。

早速、所長による幹部紹介に続き、艦艇装備研究所の概況説明を受けられた後、所内視察に移られた。

最初に、艦艇装備研究所の研究開発成果の一部が展示されている十二号館一階展示室において、堤研究企画官をはじめ、山北システム研究部長、太田航走技術研究部長、林探知技術研究部長、柴田川崎支所長等の立会のもと所長説明を熱心に聞かれ、特に動力推進研究室の模型スターリング機関の作動原理の説明には強い関心をもたれた様子でした。

次いで、フローノイズシミュレータ実験棟において、山北システム研究部長よりエントランスにある縮尺模型を前に本施設の概要及び目的について説明を受けられた後、早速、計測胴でプロペラキャビテーション試験の模様を視察された。胴内の動力計にセットされたプロペラ端部から螺旋状にキャビテーションがでる様子をストロボで御観察になるとともに、計測胴前では同時に艦艇用プロペラの水中振動特性試験の様子をご覧いただき、係員に質問されるなど、しきりに感心されたご様子であった。その後、地下の吸音塔及び水流ポンプの管路部分を視察され、全水量などについて担当者に質問しておられた。

引き続き、大水槽に赴かれ、早速大水槽曳引車に乗車されて護衛艦模型の平水中抵抗試験の状況を視察された。試験中の曳引車上において、本施設が昭和五年からのものであること、又、海上自衛隊で建造される艦艇の試験は全てここで実施されていることをお聞きになられるとともに、所長から、約二万トンある大水槽の水が、災害非常時の近隣住民用の飲料水等として使用することになっていることを聞かれ、感銘を受けられたご様子であった。

次に耐衝撃実験棟に移動され、太田航走技術研究部長より耐衝撃評価試験装置の概要や作動原理の説明を受けられた後、ビデオ映像により潜水艦用の配管、継手や護衛艦用の消化海水ポンプに対する衝撃実験の状況をご覧になられた。その後、実験棟の地下に降りて本装置の構成を間近で視察され、国内外で無二の衝撃模擬方式に高い関心を示された。

次いで、耐圧試験タンクと動的圧力発生装置を備えた耐圧実験棟に移られ、深深度海中における超高圧環境や魚雷・機雷などの近接爆破によるバブルパルスなどの影響が模擬できる機構について説明を受けられた後、棟内に展示された試験供試体を本装置と共に視察された。この供試体は米国海軍水上戦センター（ＮＳＷＣ）との間で進められている先進船体構造材料に関する研究成果の一例であり、本日米共同研究の推移と計画に関する概説をお聞き頂いた。更に、下北試験場やＮＳＷＣなどの屋外で行われた水中爆破の試験状況について、録画ビデオと試験供試体を用いた説明を受け、爆破により溶接箇所の裂けた金属試験体を興味深く観察され、艦艇装備研究所の視察を終了された。

このように限られた時間の中ではありましたが精力的に施設を回られた後、三十九号館耐圧タンク実験棟でお見送りを行い、副大臣からは、本視察に対する謝意と激励を頂き、本部長ほか幹部職員に見送られて艦艇装備研究所に向かわれた。

艦装研における説明状況

第17回 技術研究本部・防衛大学校連絡会議

さる六月二十四日艦艇装備研究所において第十七回技術研究本部・防衛大学校連絡会議が執り行われた。

本会議は、共同研究のあり方等を検討事項として年一回技本と防大において交互に主催される会議であり、今回は、艦艇装備研究所において実施された。

会議は、本部長及び学校長の挨拶で開始され、「技本・防大研究交流について」「中長期技術見積り」を技本企画課長が、「二十年度防大特別研究について」を防大教務部長が「理工学研究科の現状について」を防大理工学研究科教務主事がそれぞれ発表した後フリートーキングを行い、その後、艦艇装備研究所及び先進技術推進センター（目黒地区）の見学を行い盛況のうちに会議を終了した。

挨拶をされる五百旗頭防衛大学校長

先進個人装具システムを体験される馬場副校長

電子装備研究所長着任挨拶

喜田　雅男（技官）

この度の電子装備研究所長への就任にあたって、日頃の業務を通して感ずるところを述べたいと思います。

近年の防衛省・自衛隊を取り巻く様々な状況のなかで、装備品の研究開発業務においても、既に従前からの単なる延長ではない職員の意識を含めた変革を図りつつ進展することが求められている時代になっています。私が入省した頃と比較すると装備のシステム化指向が一段と進み、実施すべき研究開発事業の選択が明確になされるようになり、個々の事業についても適用される技術分野の広がり、高度化、進展の速さが感覚的にはムーアの法則を凌駕するとも思える程になっています。また、業務執行の面でも、着実なプロジェクトの推進のためにはリスクを回避し、限られた人員、経費等をより効果的・効率的に使うための知恵をしぼり汗をかく努力が益々必要となっています。

民間企業等では、無形有形を問わず、幅広いあらゆるものが商品として顧客に対してタイムリーかつ合理的価格で市場に送り出され、類似品との競争から顧客満足度に至るまで、厳しい評価に晒されるとともに淘汰されています。

これを我々が研究開発を通して装備品を創製する立場に当てはめるならば、技術研究段階での技術検証のための「製品」の製作に始まり、最終的には必要な試験検証評価等を受けた対象システムが初めて「商品」に相当する装備品として運用側へ渡され、爾後、運用期間中でのユーザビリティ等の評価が実施されることになっています。

戦闘場面においては、相手に対する自己の使用する装備の総合能力の優位性が戦いの状況に影響するばかりでなく、場合によっては自身の生命まで託すことになる可能性を持っています。そのために装備技術は、機能・性能面は当然のこととしてもコスト面のほか書類に明確に表れ難い性能にも十分配慮し、様々な稼動環境においてもグレースフル・デグラデーション、フール・プルーフ等の能力発揮に有効に応えられるようユーザの立場に立った装備品（商品）づくりに傾注してゆくことが重要です。

また、現在全体的に行われている目標、期間及び経費等を事前に設定するフィード・フォアード型の研究開発事業における事業推進者は、期待する成果が短期間で着実に得られる様に、省外の有効な新規技術を含めた技術活用を積極的に図る等の種々の手段を模索・構築し、装備への展開をも意識したリーダーシップを強く発揮することが望まれます。

更に、組織が有効に機能し、内外への成果発信を伴う存在感のある組織として評価されなければ自己満足のみで終わってしまいます。そのためには、基本となる「コミュニケーションの活性化」が不可欠で、各人が職務遂行内容に応じて能動モードに移行し職責に応じた意欲的な対応を期待しているところです。このコミュニケーションによって、研究業務だけでなく副次的効果として例えば、若手職員に対する組織内ＯＪＴでのインセンティブ付与、不具合事項の生起予防及び野外試験等における事故の未然防止等極めて広範囲に渡って寄与するものと考えるからです。

冒頭に述べましたように、研究開発に対する環境は、従前に比して大きく舵を切っているように見えますが、本質的には、メリハリを効かせながら過去の負の遺産を整理しつつ組織本来のあるべき姿に立ち返る一連のプロセスであるように思います。

研究開発に携わる方々には、今後幾多の困難に直面した場合においても本来の目的・目標を見失わず、真摯な対応で問題を克服してゆく喜び、或いは苦労をメンバーで分かち合うとともに、技術に対しても秘めたる情熱の炎を絶やさず積極的な姿勢と知識・経験に裏打ちされたセンスを発揮し「信頼ある装備品の創製」に邁進してゆくことを期待します。

先進技術推進センター所長着任挨拶

住吉　修平（技官）

技術研究本部は、研究開発の一層の効率化を図るため、技術分野別集合体としての五つの研究所を四つの装備体系別の研究所と先進技術、基盤技術を集中的かつ効率的に実施するセンターに集約するとして、平成十八年七月三十一日の組織改編により、先進技術推進センターを新設しました。その二代目センター所長として、平成二十年四月一日に着任しました。宜しくお願い致します。

当センターでは、佐藤前所長の指導の下、発足時より「組織横断的かつ迅速な試作と実証による将来装備システムの創生」をセンターのビジョンとして掲げ、運用サイド及び省内外の研究組織・機関との連携を図り、研究活動を実施しております。研究所等の中では、一番小さい組織（定員七十五名）ですが、これをメリットとして、フットワークを軽くし、組織の垣根を乗り越え、センターが一丸となってあらゆるニーズに柔軟に対処できる研究組織にしたいと思っております。

そのためには、第一に人的資源が少ない中で、これをカバーするためにも個々人の能力を十分に引き出すことが重要と考えております。孔子の言葉（＊1）にもあるように、個々人が業務を楽しめることが大事と考えておりますので、微力ながらもセンター職員がこれを実現できるようアシスト役に徹してまいりたいと思っております。第二にトラブルを恐れずに積極的に！と考えております。技術研究本部においては、研究開発にトラブルは付き物であると認識されており、それに対処する手立ても用意されております。個人的な経験からしても、トラブルからは学ぶべきことが多く、ある意味チャンスであり、トラブルシューティングが技術者を鍛えてくれると考えております。但し、やるべきことをやっていない手抜きのトラブルは問題外！　トラブルを隠蔽することは最悪!!と心得ていただきたいと考えております。第三にこれが一番大事なことですが、本人始め家族全員が肉体的にも精神的にも健康であることが第一と考えております。特にメンタル面では「自分一人で頑張るな！　家族でも友人でも上司でも、頼れるものはすべて頼れ」と思っております。

最後になりますが、先進技術推進センターのスローガン「ミッション、パッション、ハイテンション」（＊2）の下、センター職員とともに頑張っていきたいと思っておりますので、宜しくお願い致します。

（＊1）：「子曰、知之者、不如楽之者。好之者、不如楽之者」（之を知る者は、之を好む者に如かず。之を好む者は、之を楽しむ者に如かず。……頭で知るだけでは、経験を通して好きになることに及ばない。好きなだけでは、一心同体となって楽しむことに及ばない。）

（＊2）：出典「働く気持ちに火をつける」斉藤孝　文春文庫

技術企画部長米国出張

石塚　泰久（事務官）

初めてとなる技本勤務を拝命して三ヶ月となる四月中旬に、ＤＡＲＰＡ等米国技術戦略関連部署を訪問し、日米間の技術交流について意見交換する機会を得たので、その旨を報告するとともに、その際にかいま見た米国の研究機関の実態について感じたところを述べることとしたいと思う。

出張は、四月九日から十三日にかけての短い期間にＤＡＲＰＡ、ミサイル防衛庁、ペンタゴン等を駆け足で訪問するに慌ただしいものとなったが、現地のＢＭＤ技術連絡官（イージスＢＭＤオフィス駐在）及び在ワシントン日本大使館に出向中の技本職員をはじめとする関係者のご尽力でよく計画されたスケジュールに従い有意義な出張となったことにまず、感謝したいと思う。

無人自動車による走行コンテスト

最初の訪問地は、小生が昔勤務していた米国国防大学（日本の防衛研究所に当たる組織）の付属研究所で、当時の上司に技本の概要を説明するとともに最近の米国の軍事技術戦略等について意見交換を行った。その中では、イラク、アフガン戦に関連する技術に注目する一方、中国の軍事技術の動向に関心を示していたことが印象に残った。

翌日、ＤＡＲＰＡを訪問したが、本年はＤＡＲＰＡの創立五十周年に当たり、訪問した日にその記念行事を行っていたというタイミングの悪い日であったが、副局長自らの概況説明を受けることができ、米国内でもその実績が高く評価されているＤＡＲＰＡの成功の秘訣の一端を知ることができたように思う。各プロジェクトについて一年程度で評価基準に基づいて取捨選択を行っていることや、三軍から短期の研修生を受け入れ、ＤＡＲＰＡとの窓口としている点など技本にも参考となる点があったように思う。

次に、バージニア州ダーグレンにあるミサイル防衛庁のイージスＢＭＤオフィスを訪れ、ＢＭＤに関する日米共同研究について意見交換を行った。ダーグレンには最近、移ってきたそうだが、元々は、米海軍の射撃レンジがあった所で、そうした関係で米海軍のコンピューター研究のメッカであったことから、ＢＭＤのオフィが移ってきたとのことであった。実際、計算機センターでは、様々な組み合わせとなるイージスＢＭＤのコンピューターシステムをチェックしているという話を聞いて感慨深かった。

翌日は、ペンタゴンを訪問し、国防科学技術に関する戦略を担当している国防技術研究本部を訪問した。その際、当方から中長期技術見積もりの向上のために実施している技術マップ作成のプロセスを説明し、将来技術動向の予測等に苦労している旨説明したところ、米側でも同様の苦労をしており難しい仕事だとのコメントをもらい、技術の評価

米陸軍研究開発技術司令部司令官が技本を訪問

平成二十年六月三日（火）午後、米陸軍研究開発技術司令部（ＲＤＥＣＯＭ：Research, Development and Engineering Command）のロビンソン司令官（少将）がマリン最先任上級曹長以下四名が技術研究本部を訪れ、石塚技術企画部長及び川合技術開発官（陸上担当）を表敬した。

同司令部は、米陸軍装備司令部（ＡＭＣ：Army Material Command）において、医療関係を除く陸軍の研究開発並びに装備品の維持・向上を一元的に担っている組織であり、軍人・文官を合わせた職員数は一万三千八百人（うち六二％が研究者・技術者）、契約職員を合わせた総人員は一万八千人、年間予算は約五十億ドル。主に基礎・応用研究を行う米陸軍研究所と技術分野別の七つの研究開発技術センター等を傘下に有している。ロビンソン司令官の技本訪問は今回が初めてであり、内局訪問に合わせ、意見交換を兼ねて訪れたもの。

ＲＤＥＣＯＭと技本の関係としては、その傘下の研究機関とこれまで五件の日米共同研究を実施してきており、現在も今年三月にＭＯＵが締結された携帯型化学剤自動検知技術の研究を実施しているなど関係性は深い。また科学技術者交流プログラムにおいて、これまで日米間で技術者の交流を行っている。

技術企画部長表敬時には、技術研究本部の概況と米陸軍との研究協力に関してブリーフィングを実施し、これまでの日米共同研究に関して互いの所感を述べるとともに、今後の技術協力に関して意見交換を行った。また技術開発官（陸上担当）表敬時には、陸上開発官から、終始和やかな雰囲気の中、現在開発の最終段階にある新戦車についてその概要を説明し、陸上装備品の研究課題等について意見交換を行った。

また、同司令官は内局を含め技本の日米共同研究の関係者に対し、ＲＤＥＣＯＭの活動概要、興味分野等についてブリーフィングを実施した。日米の出席者間で活発な意見交換がなされ親睦を深めることができた。

技術開発官（陸上担当）室においてのブリーフィング

ブリーフィング後の集合写真

2008 日仏防衛技術セミナーを開催

平成二十年五月二十六日（月）市ヶ谷D棟技本大会議室において、日仏交流百五十周年を記念し、仏国国防装備庁（DGA）研究・技術部長（防衛・セキュリティ担当）ブレアン中将以下六名を迎え「2008日仏防衛技術セミナー」を開催した。

DGAは職員約一万八千人、研究開発に関する年間予算十四億八千万ユーロを有する防衛装備品の研究、試験評価、調達等を行う組織で、技本とはこれまでテーマを決めて日仏それぞれで防衛技術セミナーを開催するとともに、「フローノイズシミュレータと大型回流水槽の比較試験に関する行動計画」に基づき研究協力を実施しているところ。

今回のセミナーは二つのセッションが行われ、「相互理解・技術戦略」に関するセッションではDGA及び技術企画部企画課からそれぞれの組織の紹介及び技術戦略について、「テロ対策関連技術」に関するセッションではDGA、陸上装備研究所及び先進技術推進センターから地雷探知、IED対処技術等について発表が行われた。

セミナー終了後、ブレアン中将等は佐々木本部長を表敬。仏側から技術交流のさらなる推進と、来年度フランスでのセミナー開催の提案があった。

翌日の二十七日（火）午後、仏国訪問団は艦艇装備研究所を訪問し、展示室、フローノイズシミュレータ、大水槽、耐衝撃実験棟及び耐圧タンクを見学した。

各施設では、担当者による説明のほか同行した九田所長からの機知に富む解説もあり、活発な質疑応答が行われた。特に、一行は研究協力を実施中のフローノイズシミュレータについて熱心に視察し、運転中の雑音を聴診器で直接確認するとその静粛さに驚くといった一幕もあった。

施設見学は終始和やかに進み、一行は満足して艦艇装備研究所を後にした。

ギフト交換をされる本部長とブレアン中将

艦装研における説明状況

技術開発官（陸上担当）ユーロサトリ訪問を終えて

ユーロサトリは六月十六日～二十日にパリ郊外で実施され、百二十五カ国が参加により行われた陸上装備品展示会である。今回、陸上開発官川合陸将及び第六開発室長阪井1佐が本展示会を訪問し、陸上装備品を見学した。本展示会では特に対テロ・ゲリラ含む多様な任務対応の装備が目についた。火器については、リモートウェポン化、車両については、装輪車が主流となっており、これら全てにIED対策等が施されていた。またNBC装備についても高速で検知出来る装置が開発されている等、技術を結集して多様な任務に対応しようとする努力が伺われた。また、C3Iシステムについては、柔軟な連用が可能な装置が開発されており、個人携行可能な衛星装置も展示されていた。さらに訪問中、フランス装備庁高官と会談し、両国間に法的等の制限はあるものの、多種多様な任務に対応するためには、両国が防衛面で技術交流行うことは重要であるとの相互認識ができ、非常に有意義な研修であった。

ユーロサトリ展示装備品の説明を受ける開発官

技本と内局・雑感

経理装備局システム装備課長　外園　博一（書記官）

昨年九月から、二度目の内局勤務をしております。技本と内局間の仕事は、訓令や通達等に基づいた比較的定型の業務がそのほとんどと思われているかもしれませんが、実はそれ以外の様々な業務が一杯あります。そのような技本との業務を通じて、この約九ヶ月間に感じたことをお伝えしたいと思います。

着任以来、経理装備局が対応すべき様々な事案が発生しました。輸入商社による過大請求や偽物装備品の納入、イージス艦あたごと漁船の衝突等々、まさに一時に集中した感があります。これらの事案は、どれもが技本には直接関係のないことばかりと思われるかもしれませんが、実は今回の件について技本からの技術的支援を数多く頂きました。現時点で個々の事案が最終的に決着していないため、その具体的内容についての言及は控えさせて頂きますが、正直言って、技本は防衛省・自衛隊の中で極めて質の高い頼りになる機関であると改めて感じました。様々な突発事項への対応をお願いした時、幅広い分野での日頃の研究開発活動を通じて身についた個々の方の技術力や素養こそが、的確な技術的回答を可能にさせるのだなとつくづく感じました。勿論、これまでこの他にも、イラク人道復興支援活動に係る装備・資材への協力など、色々な場面で技本の技術力が活かされた事が多々あったと思います。このような技術的に頼りになる技本こそが、防衛省・自衛隊のみならず社会における技本の存在価値をより一層高める源であるとともに、外から技本を見ていて最も誇らしく思える時でもあります。小生も、技本に戻った際は、さらに研鑽を積みそのような技本に少しでも貢献したく思っております。

一方、技本から見た内局はどうでしょうか。近頃は、行政に対する透明性や、社会や国会に対する説明責任をより一層問われるようになっています。そういった点から以前にもまして、技本はもとより各機関に内局からお願いする業務が増えて、想像ですが、「内局は屋上屋を重ねるばかりで一体全体なにをやっているんだ」というご指摘が聞こえて来そうです。しかし、透明性や説明責任は、行政府のみならず社会全体の趨勢であり、これを避けて通ることはできません。そのために技本や各機関の役に立つのが内局の仕事であると考えていますし、各機関の方が最も働き易い環境を作るよう努力していくつもりです。あそこにいったら業務ばかり増える→必要以上には会わない（説明しない）→意思疎通が不足で相手のことが理解できない→消極的権限争いや組織防衛のみ、といった負のスパイラルに陥らないためにも、是非気軽にかつ活発に意見交換をして頂けると幸いです。

信頼は成功の鍵 ～平成十九年度MOT研修を受けて～

艦艇装備研究所　萩原　祐史

企業買収や合併がメディアをにぎわせていますが、単に規模の拡大の側面だけに注目して行うべきではありません。企業を動かしているのは、資本金ではなく、人です。それぞれの人材がもつ情報や、知識、能力を引き出し、社員と経営者、あるいは社員同士が相互に価値を共有し、さらに創造することで、企業は社会に対して意味ある商品やサービスを提供できるのです。そのためには、コミュニケーションを通じたお互いの信頼関係が重要です。卒業される皆さんには、『信頼は成功の礎』という言葉を贈りたいと思います。」（平成二十年三月二十五日学位授与式にて）

技本における人材育成の取り組みの一環として、平成十九年四月から一年間、早稲田大学大学院商学研究科専門職学位課程ビジネス専攻（早稲田大学ビジネススクール）のMOT（Management of Technology）プログラムに通いました。このビジネススクールは、現実的な問題解決能力と高い専門性を有する高度専門職業人の養成を目的とした経営専門職大学院で、MOTプログラムは、技術と経営の連携を図る人材を育成するためのプログラムです。

MOTプログラムでは、テクノロジー・マネジメント、オペレーションズ・マネジメント、インフォメーション・マネジメント等の修得が中心ですが、会計、ファイナンス、マーケティング、経営戦略、人材組織等といったビジネスに必要な基礎的な知識も一通り修得しなければなりません。

授業は、ケースディスカッションやグループワークによって進められます。例えば、グループワークは、履修している学生を四～六名程度のグループに分け、与えられた課題について、グループ毎に検討し、その結果を発表します。

検討は、授業時間外に行われる場合がほとんどです。発表までの流れは、昼休みにレストエリアで弁当を食べながらメンバーと議論し、課題解決の大まかな方向性が見えてきたら、発表者と発表までの作業分担を決め、最後に作業結果を取りまとめて発表資料に仕上げるといった感じです。

短い場合、このプロセスを一週間で行わなければなりません。全員が集まる機会が少ないので、情報のやり取りは、大半がメールです。しかも、メンバーの多くが、普段は企業で働いているので、メールでのやり取りは、二十時以降になる場合が多く、深夜から早朝に掛けてメールを送受信することもありました。

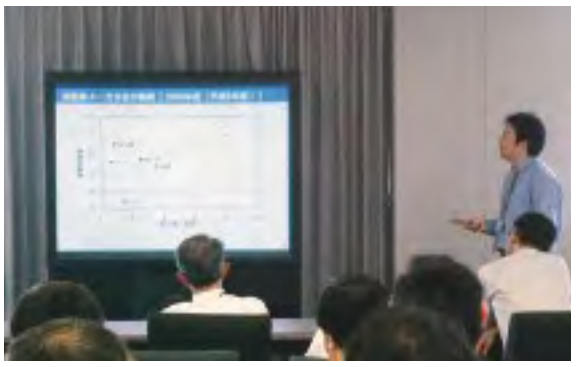
グループのメンバーは、常に前向きで積極的に取り組みます。そして、自分のことだけ考えるのではなく、お互いに助け合います。グループワークが終わり、みんなで飲みに行った時、「なんか、まるで戦友みたいだね」と話していました。まさにグループという単なる集団ではなく、一つの目的を達成するための一体感のあるチームでした。

このように成果をまとめることができたのは、メンバー同士の信頼関係がベースになっていたように思います。私もみんなの足を引っ張らないように、それなりに頑張ってきたつもりです。チーム内での私の成果は、小さいかもしれませんが、メンバーのみんなは、私の頑張りを認めてくれたのではないでしょうか。そして、この頑張りが、メンバーとの信頼関係を作ったのではないかと思います。

そういえば、「技本の使命」の中にも信頼というキーワードが含まれています。「信頼される装備品の創製と国の安全保障への貢献」。皆さんから信頼されるように頑張らなくてはいけません。

さて、発表も無事に終わり、「いつも昼休みは、グループワークで生協の弁当ばっかりだったから、たまには外に食べに行かない？」なんて話しながら歩いていると、別の授業のグループメンバーとばったり会いました。「あっ、萩原さん、ちょうど良かった。これからマーケティングの発表のことで、みんなと話し合うんで、レストエリアに来てくださいね。」

やれやれ、やはり信頼関係を築くには、相当なエネルギーが必要になるのですね。


5月22日　於本部大会議室

技術顧問会議

去る三月十四日、本部大講堂において平成十九年度顧問会議が開催された。

この会議は、本部長が技術研究開発の全体または共通的技術事項のうち特に重要な事項等について、技術顧問の意見を求めるため、年二回開催されるものであり、構成員は、技術顧問及び本部会議構成メンバーから成るものである。

会議は、「予算・組織定員」「研究開発主要事業」「防衛省改革関連の紹介」「平成十九年度研究発表会（公開）～防衛シンポジウム２００７」「新戦車の概要説明」「技本における将来戦闘機技術への取り組み」「陸上装備研究所基本方針（案）」をそれぞれ質疑応答を挟み研究報告を行った。

それぞれの質疑応答では、報告内容の質疑応答にとどまらず、これからの技本のあり方などについても貴重なご意見を伺えるなど今後の研究開発の進め方にとって有益な意見が得られた。盛会のうちに技術顧問会が終えられたことは、関係者はもとより、技術研究本部全体にとって、今後の研究開発を推進する上で非常に有意義であった。

技術顧問の方々

陪席者

質疑に応答する安江前本部長

退職記念講演

十九年度は、退職予定者を対象とした記念講演会を二月、三月に開催した。先輩方のご退官に当たり技術的なノウハウや、体験などを後輩に伝承するものとして講演を行い、その資料をデータベース化して後世に残そうとするものである。

二月二十五日に電子装備研究所、先進技術推進センター、三月五日に技術開発官（船舶担当）付、艦艇装備研究所の合同講演会、三月十二日には陸上装備研究所、三月十八日には土浦試験場、三月十九日に航空装備研究所において行われた。

これら一連の講演の最後を飾る安江前本部長による講演は、三月二十一日、D棟九階の大会議室において開催された。「T－2CCV（T－2を母機とした研究機：一九七三～一九八六年度）－青春の墓標－」と題し、本部長がCCVプロジェクトにおいて、ご苦労され、考えぬき、その中から私どもに伝承すべき事についてユーモアを交え話された。本公演では本部、開発官、各研究所から約百八十名の聴講者を集め盛会のうちに終了した。

安江前本部長講演の聴講風景

安江本部長　離任の挨拶

皆さん、こんにちは。

先程、大臣より退職の辞令書を頂いて参りました。

本日をもちまして、防衛省を去ることとなりました。皆さん本当にこれまでありがとうございました。

今こうして、清々しく、そして充実した気持ちで今日という日を迎えることが出来たのも、ひとえに皆さんの支えがあったからこそだと思います。ありがとうございました。

皆さん良くご存知のことではございますが、私はトラブルと変化と仕事が大好きです。平々凡々と大過なくは面白くはないので。

勿論、お酒もそこそこ好きですよ。

誰ですか。そこそこではないと言うのは。

防衛省での日々を振り返ってみますと、昭和四十四年、一九六九年の入庁以来、昼間はがむしゃらに働き、夜は夜な夜な仲間達とワイワイ騒ぎ、そして暇さえあれば「あーでもない、こーでもない。」と研究開発について熱く語り合う毎日ではなかったかと思います。

先週の金曜日の講演で「おまけのスペシャル動画」として流した動画は、確か私が三十九歳の頃、朝から晩まで、トイレに入っている時も、いつも若い人をどう育てるか考えていた頃のものですが、いや～本当に若かったですね。髪の毛もあんなにあったんだなぁ……と、改めて防衛省と共に過ごした年月の長さを、しみじみと考えさせられました。

ふと気が付けば、私も親父に似てきました。子供は、私の性格には似ず、芝居だ、映画だと、DNAが受け継がれませんでしたが。

研究開発における技術はこうであってはいけません。先輩から後輩へ、その後輩から更に後輩へと、技術は伝承していかなくてはいけないものなのです。皆さんには、技術研究本部創設以来培われてきた技術を、これからも未来の方々へと伝承して頂きたいと思います。

私事でございますが、退官後にやりたいことが私にはまだまだ沢山ありますので、防衛省在職中と変わらぬ情熱を持って色々なことにチャレンジしたいと思っています。日本人男性の平均寿命が約七十九歳ですので、単純計算でも最低あと十六年はあります。時間はまだまだたっぷりと有りますので、今後更にパワーアップしていきたいと思っています。

第一に、本を読みたいです。今、国学者の本居宣長に興味を持っています。本居宣長は、あの閉鎖的な江戸時代に古事記を解読し、冒頭の「天地の」の「あめは中国の天」とは違う大和言葉と唱えた人です。この独創性があの江戸時代にどうして生起したのか興味がある次第です。

二番目は、非常に勉強したいので、社会人大学に通おうと思っております。何を学かは秘密です。乞うご期待。

三番目は、おいしい「イタリアン」を食べたいので、イタリア語を学びたいと思っております。これまで、幾度となく「イタリア語講座」に挑戦しているのですが、最初の四月で挫折しているので、是非もう少し長く続け「ドルチェ」をイタリア語でオーダーしたいです。

最後に、こうして皆さんの前で話をさせて頂くのはこれが最後となりますが、最後にこういう場を設けて頂き本当に感謝しています。

安江前部長離任挨拶

明日からこの市ヶ谷に来なくて良いというのは、正直実感が湧きません。もし、明日も間違えて出勤して来ましたら、皆さんそっと教えてくださいね。うちのが起きませんから間違えることはないと思いますが。

これからは、佐々木本部長のもと技術研究本部の職員一人一人が強く団結し、頑張って頂きたいと思います。

応援しています。

ありがとうございました。

平成二十年三月二十四日

安江　正宏

防衛省